

令和7年度 農村 RMO 推進フォーラム（東北農政局）
質疑

日 時：令和8年2月10日（火） 13:15-16:30

場 所：TKP ガーデンシティ PREMIUM 仙台西口5階ホールB

【基調講演】

いわて地域づくり支援センター 常務理事 若菜 千穂 氏

【特別講演】

岩手大学 名誉教授、農作物野生鳥獣被害対策アドバイザー（農林水産省）
青井 俊樹 氏

【事例発表】

麓のカラコ協議会 副会長 中山 功大 氏

清流と山菜の里ほその村 会長 五十嵐 幸一 氏

【全国情勢報告者】

農林水産政策研究所 次長 八百屋 市男 氏

<基調講演：いわて地域づくり支援センター 常務理事 若菜 千穂 氏>

説明の中で「RMOの資金で事務局の給与を払う」とおっしゃっていたが、普通の雇用に足りうるだけの予算はあるのか。

若菜氏（いわて地域づくり支援センター）：

奥州市伊出地区は令和4年から農村RMOのモデル地区に選ばれ、R4・R5・R6と上限1,000万円をいただいた。

R5とR6は、若い人材の雇用に耐えうる人件費を農村RMOの補助費から支出しました。金額としては数百万円。

質問者：

農地保全に関わる事務局費など、様々な項目があったと記憶しているが、人件費は年間雇用のようなものには使えないと考えていた。この認識で相違ないか。

若菜氏（いわて地域づくり支援センター）：

後ほど説明があると思うが、3つの事業を実施する中で分散しつつも、全体として数百万円、一人分の若い人材を雇用できるお金をいただき、その方への給与として支払った。

（農政局担当者へ向けて）大丈夫かどうか補足いただきたい。

農政局担当者：

事務局そのものの運営のための人件費ではなく、その活動のための人件費という整理であれば問題ない。

若菜氏（いわて地域づくり支援センター）：

その方は農村 RMO 事業全般に関わって作業したため、その作業にかかる人件費という位置づけ。組織運営の経費ではなく、活動に関わる費用。ただし、その方は専従で、他に仕事をしなくてもこの伊出地区の農村 RMO 事業だけで生活できる程度の給与をお支払いした。

質問者：

承知した。常時・通年の雇用ではなく、1時間や2時間といった作業に対して支払うことは可能であると理解した。

もう1点、指定管理について伺いたい。町からコミュニティセンターの指定管理を受ける場合、人件費をつけてもらえるという話があった。私たちの地域では、かつて役場の出張所だった場所が廃止され、今は使用されていない。そこをRMOの事務局として利用しているが、町に人件費をお願いしたところ、「人件費削減のために撤退した場所に、再度人件費を充てることはできない」という回答だった。

一方で、今年度視察した山形県では、市町村が人件費をつけていた。市町村によって温度差があると思うが、私たちが努力していくべきということか。

若菜氏（いわて地域づくり支援センター）：

まさに平成25年からずっと研究を重ねているところ。市町村にもよるが、行政職員の人数は今後ますます減少していくだろう。

そのため、市町村としても地域でできることは地域で担うための体制や仕組みづくりを進めていく必要がある。私は議員、市町村職員、首長の方々向けにも講演を行っている。

地域だけが頑張るのではなく、一般RMOの皆様にも少し調べていただいた上で、講演や働きかけを行うなど、支援の声を上げていただきたい。農村RMOの出口

として、市町村との連携は不可欠だと考えている。こうしたフォーラムも多く開催しているため、ぜひご参加いただきたい。

<事例発表：横岡・舟岡地区 麓のカラコ協議会（秋田県にかほ市）

副会長 中山 功大 氏>

多岐にわたる取り組みで、気づきや示唆に富んだ内容だった。
一方で、移住者や若い方が頑張ると、地元住民が引いてしまうケースも多くの地域であるのではないかと思う。地域の方の温度感やコミュニケーションの面で、気をつけていることがあれば教えていただきたい。

中山氏（麓のカラコ協議会）：

地域の方が引いてしまうということは、この3年間であまり感じなかった。その理由として、私たち自身が5年前から集落に住み、イベントへの参加や、ゲストハウス「麓マス」に宿泊された方々と地域住民をつなぐ活動など、継続的に交流を重ねてきた点が挙げられる。

私たちの施策は、基本的に株式会社 Ventos が考えるが、地域の方々からいただいた課題をどのように事業化にできるかを再解釈し、まず私たちが始め、賛同してくれる方々が後から加わるという流れを作っている。

集落の方に責任を押し付けるのではなく、まず自分たちが走り、それにつながる形で広げていく。そういった感覚で取り組んでいる。

<細野地区 清流と山菜の里ほその村（山形県尾花沢市）

会長 五十嵐 幸一 氏>

除雪について伺いたい。除雪隊が28カ所を担当しているとのことだが、尾花沢市は積雪が多く、1日3回は雪かきが必要な地域もあると聞いたが、現状で作業は追いついているのか。

五十嵐氏（清流と山菜の里ほその村）：

現在28カ所を対応しているが、3つの班に分けて配置している。日中に作業できるのは自分を含め3人のみ。土日は異なるが、平日は3人で3つの班に分か

れて除雪している。

尾花沢市では1日に2回除雪が必要で、冬期間に60回程度出動する。

質問者：

雪による事故も多発しているため、除雪隊の存在はとても重要だと思う。

五十嵐氏（清流と山菜の里ほその村）：

移住者の方々には優先的に除雪を行う。除雪機を購入すると500万円もかかるため、私たちが対応する。

勤務されている方々が時間に間に合うよう、また、デイサービスなど時間が決められている場所へも時間通りに到着できるよう、こちらで手配し除雪作業を行っている。

<岩手大学 名誉教授 青井 俊樹 氏>

緩衝地帯の話で、クマが畑の中央ではなく、へり（畑の端）を歩くというお話があった。

私たちの川沿いにも木が多く、そこを伝ってクマが移動しているのではないか、という話もある。クマは木の影を狙って移動するのか、それとも緩衝地帯を整備すればクマは出没しにくくなるのか。

また、クマは夜行性なのか。

青井氏（岩手大学 名誉教授）：

クマは少しでも身を隠せるものがあれば、それをうまく利用して移動する。

特に河畔林が連続していると、そこを利用して思わぬ遠くまで移動することは普通にある。町の近くの小川などは、河畔林をきれいに刈り払い、見通しを良くすることは意味がある。

ただし、緩衝帯を広く作ったとしても“全く出てこない”というほどの効果はない。しかし、嫌がらせ効果として、昼間に出没していたクマが夜間に移動するようになったり、他のルートを使うようになったりするなど、行動パターンを変化させることがある。

夜行性かどうかについては、一概には言えない。りんご園に出没するときは大抵夜間だが、田んぼに出て稲穂を食べるときは昼間が多い。これは、稲穂の中は見通しが悪く、安心して食べられるためである。

クマは“場所と目的”によって行動時間を柔軟に変える動物である。